原点にかえる

筒井　友弥

2021 年 8 月。依然として新型コロナウイルスとの格闘が続く日本で，世界各国の選手団が鎬を削る東京オリンピックが開催された。一方，私は猛暑との格闘の末，脂汗を凌ぐため「パワフル」に設定した冷風を浴びながら，勤務校の研究室でふと 19 年前の自分を振り返る。「回顧広独の歩み」と題された広島ドイツ文学第 34 号に投稿すべく，エッセイを執筆するためである。この記念すべき特集号に，私はいったい何を記すことができるだろう。

私が初めて広島独文学会に参加したのは 2003 年の 1 月で，第 80 回研究発表会のときである。そしてこれは，私が公の場で，初めて単独発表を行ったいわゆる「デビュー」であった。その後は, 2004 年第 82 回, 2006 年第 85 回, 2007 年第 87 回, 2008 年第 88 回, 2009 年第 90 回の計 5 回にわたり発表の機会を与えられ，また，発表はせずとも，2009 年までは毎回必ず参加した。しかし，2009 年の 4 月に京都外国語大学に奉職し，足場を関西に移して以降，主に京都で開催される学会や研究会，あるいは入試などの学内業務と予定が重なり，2013 年第 95 回での発表を除いて，丸 10 年，会への参加が叶わなかった。その後，2020 年の第 100 回と 2021 年の第 102 回研究発表会では，コロナの影響で京都での予定が中止になったり，会がオンラインでの開催となったりしたことで，幸いにも再び発表の機会を得ることができた。こうして 19 年間を回顧すると，一見してちょっとした歴史をも感じ得るが，実際には間 10 年のブランクがあり，正直なところ「広独とともに時代を歩んだ」という感覚はあまりない。いや，これでは語弊がある。もちろん，計 8 回の発表の場を与えていただいたこと，そして，学会誌「広島ドイツ文学」に, 2003 年第 17 号, 2005 年第 19 号, 2006 年第 20 号と 3 号にわたり論文を掲載していただけたことに心から感謝しており，この意味で，私にとって広島独文学会は，研究の場における原点であるとともに，なにより育て親のような存在である。そのため，私のようななんら役員を務めたわけでもなく，ただ会の恩恵にあずかってきただけの者が, 40 年続く広島独文学会の「広独の歩み」と題された記念号に，エッセイを書き残すことが畏れ多いのである。私にいったい何を記すことができるだろうと。

熟思の末，私にとっての広島独文学会は「原点」ということばに尽きる。ただし，先に「2003 年の研究発表が『デビュー』である」と記したが，実のところこれは虚偽である。研究発表という点では正しいが，広島独文学会への参加という点では，実はその約 1 年前に遡る。2002 年 4 月に広島大学大学院社会科学研究科（現総合科学研究科）に入学した私は，まだ右も左もわからぬまま，師事する吉田光演先生の勧めで，広島独文学会主催の講演会に参加した。総合科学部第 2 会議室で開かれたその講演会にはドイツからの教授が招聘され，講演はすべてドイツ語で行われた。ただでさえ，まだ研究の「け」の字も知らぬど素人である。そのうえドイツ語で言語学の複雑な話をされて，正直，内容など微塵もわからなか

った。しかし私は，質疑でわざわざ最後に手を挙げ，片言のドイツ語で「あなたの講演は素晴らしかった。感動した」と言い放った。ドイツの，いや世界の言語学者がその名を知る Armin Burkhardt 教授その人に向かって。図らずも，私は後に心態詞について博士論文を執筆することとなり，その各所で Burkhardt 先生の論文を引用している。したがって，本来この出会いは，その後の私にとって，願ってもない奇跡的な機会となっていたはずなのだ。いつ思い出しても，身の毛もよだつ黒歴史である。忘れてしまいたい汚点である。いったい自分が，なにをいかに見越してこのような愚行に及んだのか，今となってはまったくその理由が浮かんでこない。いや，おそらく計算など何ひとつなかったのだろう。ただその場の参加者に自らをアピールしたかったのだ。それまで修士課程生として過ごした京都を離れ，論文は言うまでもなく，どこの研究会や学会でも発表ひとつの業績もなかった若造が，修士時代の 1 年ぽっきりの留学経験を引っさげて，「我ここにあり！ 私を舐めないでいただきたい！」と叫んでいたのだ。決して誰も舐めてなどおらず，というより，まだ誰にも認知さえされていなかったのであるが・・・。独りよがり甚だしい暴挙である。しかし同時に，今やもう，とうに失ってしまった底知れぬ度胸でもある。

京都外国語大学で教鞭を執り，今年で 12 年目を迎える。日々学生たちに，知ったようにドイツ語を語り，ときには，偉そうに人生を説いている。45 歳を迎えてなお，貴族でもなく独身を貫くしがない“おっさん”に，いったいどれほど大局的な視点で人生など語れようか。挙句には，むやみに歳を重ねるなかで，無論多くのことを学び，しかし同時に，むしろ学ばなくてもよいことをより多く身につけてしまった気がしている。まるで遅ればせの思春期でもあるかのように，常に周りの目を気にし，いわゆる“ダサい”自分を嫌って体裁や格好だけを整えている。何を行うにもまず防御線を張り，「失敗しないように」とそればかりを気にしては，失敗したらしたで，その誤りを素直に受け入れず言い訳を並べ尽くす。普段の授業で，「間違うことは恥ではない。間違った者を笑うことが最大の恥だ」と学生たちに指導しながら，実際もっとも間違いを恐れているのは他でもない自分である。妄想や思い込みで勝手に膨れあがったプライドでがんじがらめとなって，何かに挑戦しようとする気持ちを抑え込む。そして，それを自覚していながら，「一歩」を踏み出そうとしない自分に甘んじている。

長く見積もっても，人生のおおよそ半分を終えた今，このエッセイの機会を得たことで胸に刻まなければと感じたことがある。「原点回帰」。恐れを知らず，この世界を度胸だけで生き抜こうとしていたあの頃に。いや，もう今となっては，それはさすがに無理である。周りを気にするなと言われようと，どうしても空気を読もうとするいわば計算は欠かせない。それに，そもそもそれが果敢であれ天然であれ，世界的な大教授に向かって「素晴らしい講演だった」などと意気がることは，学界における通念として「正しい」とは言い難い。ただ，大事なのは，たとえそれが周りの目には誤りに映ったとしても，きっとそれは自分にとってプラスになると信じ切ることである。計算が欠かせないのであれば，その計算が外れたと

きの対処が肝心であり，そして私の場合，往々にして計算は外れる。そのとき，格好をつけず，素直に非を認めることが大切なのだ。たかが 12 年のキャリアでプライドも何もあったものではない。私に必要なのは，むしろキャリアを積むほどに，不要なプライドをかなぐり捨て，情熱的な“なにくそ”精神で何事にも食らいつこうとする姿勢である。「少年よ，大志を抱くまえに，まず恥をかけ！」。修士時代の留学中に，将来を展望して私が自ら掲げていたモットーである。人は失敗してこそ成長する。もちろん，他人を脅かすような，他人を巻き込んでその人に迷惑をかけるような失敗は避けなければならない。だが，自分が恥じ入るだけの，自分が落ち込むだけの失敗なら何を恐れる必要があろう。恥ずかしくて悔しい思いをすることでこそ発想や気持ちの転換が必要になり，それを乗り越えたとき人はまた成長を遂げる。「失敗は成功のもと」。子どもの頃に学んだこんなにもわかりやすい道理を，私は，このエッセイを記す今の今まで忘れてしまっていた。

博士課程在学中に，吉田先生と，同じく院生の田中雅敏さん，橋本将さんの 4 人で，私の博士論文について幾度となく議論を交わすことがあった。いや，実際は 3 人が議論を交わし，私は内容を聞き漏らさぬよう必死で食らいついた。ゼミではもちろんのこと，院生研究室で，ときには学食で延々夜遅くまでなんてこともあった。そして，議論が熱を帯びるにつれ，たとえ必死に傾聴しても，私の脳力では 3 人の分析に到底追いつけないことも多々あった。他でもない私自身の論文についてであるのに，執筆者本人が議論から置いてきぼりにされた。しかし，良いか悪いかは別として，そんなとき私は，自らの知識不足を「恥ずかしい」と感じたことは一度たりともなかった。ただただ，なんとかして議論に加わりたい，分析に使われている理論を学びたいという意欲が掻き立てられた。それゆえにこそ，議論中に，「筒井は理解しているのだろう」と思われて話を進められることには耐えられなかった。だから私は 3 人に言い放ったのである。「私をもっと見くびってください」と。

「我ここにあり！ 私を侮っていただきたい！」。これこそが私の原点である。